

「男、突っ走る！」

第53回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|------------------|--------------------|-------------------|---------------------|
| 木内 雅也 (21) | 真榮田 浩平 (21) | 福沢 瑞枝 (21) | 長井 夏美 (21) | 大久保 正樹 (25) | 野添 美南 (22) | 船倉 篤志 (21) | 奥村 裕司 (22) | 山口 拓海 (21) | 山永 和也 (21) | 安永 和也 (21) | 本部 明美 (20) | 鈴木 孝雄 (54) | 吉野 茉由 (27) | 安本 真苗 (56) |
| 名古屋芸術専門学校 3年生 | 名古屋カフェ調理専門学校 2年生 | 名古屋芸術専門学校 入学事務局 局長 | 名古屋芸術専門学校 入学事務局 員 | 『スクエア・トラスト』代表取締役 社長 |

1 名古屋芸術専門学校・全景

2 同・5階・502教室

雅也が入ってくる——美南が自習をしている。

雅也「（一瞬驚いて）あれ、ナミ……。珍しいじゃん、休日に来てるなんて」

美南「（素っ気なく）うん」

雅也「自習？」

美南「補習扱いな」

雅也「補習？」

美南「卒業まで単位が足りないから。補習扱いで、課題とレポートを提出すれば、単位として認められるんだって」

雅也「そっか。俺も藤堂先生も心配してたんだよ。学校に来ないことも長く続いたし、授業だけ受けてすぐ帰ることもあったからね。でもまあ、課題とレポートの提出で単位認定されるなら、良かったじゃん」

美南「まあね」

雅也「一応授業みたいな扱いなら、一人のほうが良いね。俺、四階で自習してくるわ」

美南「気にしないで。ここおっても大丈夫だよ」

雅也「イラレとか使うの思い出したの。下のパソコンにしか、ソフト入ってないから」

美南「そっか」

雅也「早く、卒業単位までゲット出来ると良いね」

美南「そっちは？」

雅也「え？」

美南「単位、足りてるの？」

雅也「公欠とか電車遅延を除けば二年間皆勤だし、イベントごとで実行委員とかやってるから単位もあって、もう卒業単位は十分あるの。でも、せっかくここまで来たから、三年間皆勤賞目指そうと思ってね」

美南「取れると良いね」

雅也「ありがとう。じゃ、俺行くわ（と出ていく）」

3 同・4階・402教室

篤志と裕司が自習をしている——雅也が入ってくる。

雅也「あれ、二人とも自習？」

篤志「今年のゲームショーに向けての準備」

裕司「毎年出展してるんだけど、今回は学生生活としては最後だろ。つい、力入っちゃって」

雅也「良いことじゃん。俺も、ポトフオリオに向けてもうひと踏ん張り頑張らないと思ってるね」

篤志「あ……しまった。今日、うっちー誘うの忘れてた」

雅也「何の話？」

裕司「実はさ、今日ぐっちとやっすー、後ゲーム系やイラスト系の後輩と飲み会やるって話してたんだよ。しまったな、ゲームとイラストのほうばかり考えて、うっちーのこと忘れてたわ」

雅也「ああ、別に良いのに」

篤志「せっかくだ。お店に、一人追加の連絡
しとくよ。（と雅也に）うちー、今晚空
いてる？」

雅也「俺は全然良いけど。でもさ、ゲーム系
とかイラスト系に俺が入ったらお邪魔じゃ
ない？」

裕司「お邪魔なこと、あるもんか。うちー
もせっかくだからおいでよ」

雅也「じゃあ、せっかくなので」

4 同・1階・ロビー

壁を背景に吉野に写真を撮ってもらっ
ている鈴島。

鈴島「（写真データを見て）うーん、ちょっ
と顔の表情硬いかな」

吉野「そこまでは気にならないと思いますけ
ど」

と、財布を持った雅也がエレベーター
から出てきて、通りかかると、

雅也「あれ、お二人して何してるんです？」

吉野「パンフレットに同封する会報誌の写真
撮影してたの」

鈴島「（苦笑して）どうも写真には慣れてな
くてね」

吉野「木内君、ちょっと一回立ってみて」

雅也「良いですよ」

と、壁の前に立つ——吉野、カメラで
写真を撮っていく。雅也、シャッター
ごとに違うポーズをして写っていく。

吉野「さすが、うちのマスコットキヤラクタ
ーだね」

鈴島「木内君、写真慣れしてるね」

雅也「いえいえ、そんなことは」

と、浩平と正樹が談笑しながら入って
くる。

正樹「あれ、木内何やってるんだよ」

雅也「何か、カメラテストされちゃって」

浩平「俺たちも一緒に映ろうぜ」

雅也「ああ、良いね。（と吉野に）良いです

か、一枚？」

吉野「良いわよ」

雅也、浩平、正樹が並列に並び、それぞれポーズを取る。

吉野「撮るよ。はいチーズ」

と、シャッターを押す——雅也、写真データを見て、

雅也「あ、何かすごくいい感じに撮れてる」

正樹「本当だ」

浩平「良いな、これ」

雅也「吉野さん、さっきの僕の写真も含めて、後でメールで送ってもらえませんか？」

吉野「良いわよ」

浩平「（雅也に）俺にも後で送って」

正樹「俺もちょうだい」

雅也「うん」

5 同・4階・402教室

雅也がパソコンで写真の編集をしている——パソコンの画面には、ロビーで

撮った自分の写真。

篤志と裕司もパソコンで自習をしている。

篤志「（雅也のパソコン画面を見て）それ、ポートフォリオの表紙？」

雅也「そう。さっきたまたま一階で撮ってもらったんだけどさ、この写真見て思いついちやったの。自分が表紙の雑誌みたいなポートフォリオにしようと思って。それなら、より個人的で自分をアピール出来るんじゃないかと思って」

裕司「確かに、うちーは雑誌編集もやってたもんな。そのスキルも活かして良いかもしれないな」

雅也「うん」

と、和也と拓海が入ってくる。

和也「お疲れ」

拓海「ういーっす」

篤志「お、来たな」

裕司「今日、急遽うちーも参戦することに

なつたから」

拓海「そりゃ楽しみだ」

和也「ああ、うちのーの存在すっかり忘れてた」

篤志「俺のしたことが。本当に申し訳ない」

雅也「良いつて。声がかかるだけでも、ありがたいと思わなきゃ」

拓海「（篤志に）五時半からだっけ？」

篤志「そう。だから、ロビーに五時十五分集合つてみんなに伝えてある」

和也「だから俺たち、早めに来た」

雅也「五時十五分か。（とパソコンの時計を見て）もう少しできるな、キリの良いところまでやっちゃおッ」

6 居酒屋（夜）

雅也、篤志、裕司、拓海、和也、その後輩たちがそれぞれ酒を飲みながら談笑している——冷酒を飲んで顔が赤くなっている雅也。

篤志「うちー、結構赤いな」

雅也「（酔って）あら、そう」

裕司「お、またオネエスイッチ入ったか」

雅也「いやあねえ、んなわけないでしょ。変

なこと言いなさんな」

和也「これが噂のオネエうちーか」

拓海「見れて良かったわ（とスマホで撮影する）」

篤志「ぐっち、それ飲み会LINEのトップ

画像にしよう」

雅也「また？」

篤志「またって何だよ」

雅也「私、高校の友達のグループでも、トッ

プ画に使われてるんだけど」

裕司「やっぱり、うちーは歩くフリー素材

なんだな」

雅也「そうなのよねえ、きっと」

目がうつろうつろしながら、ケラケラ

と笑っている雅也。

『学園祭』の看板が掲げられ、高校生などの来場者の行き交いが激しい。

ドアの前に作られたテントが、焼き鳥の屋台の設えがなされており、浩平と正樹が炭火で焼き鳥を焼いている。

その前で声がけをしている瑞枝と夏美。

瑞枝「いらっしやいませ」

夏美「焼き鳥美味しいですよ、いかがですか

あ」

手際よくパックに焼き鳥を詰めている

浩平。

正樹「さすが居酒屋でバイトしてるだけあるな。手際が違ええわ」

浩平「そりゃ、どうも」

と、ノートとペンを持った雅也が出てくる。

瑞枝「あ、うちー。どう、焼き鳥？」

雅也「後でゆっくり買いに来るわ。今から、会場いろいろ回って取材なの」

浩平「ああ、学校新聞のやつか」

雅也「そうそう。あ、せっかくならここも取材しよう」

夏美「ぜひお願い」

雅也「ここはあれだね、映像系メンバーの有志って感じね」

瑞枝「そうなの。この後、シフトで交代するけど、映像系の後輩たちも結構参加してくれて」

雅也「あれ、加藤は？」

正樹「最後の年は、一般客として楽しみたいんだってさ」

雅也「（苦笑して）まあ、あいつらしいね。
（と浩平に）メニューは、鶏ももと鶏皮とねぎま？」

浩平「ああ。全部美味しいぞ。また後で食べてくれよ」

雅也「うん。（とノートにメモをすると）ありがとう、じゃちよっと回ってくる」

一同「いってらっしゃい」

ケーキや焼き菓子の販売が行われ、高校生や一般来場客が購入している――

明美が声がけをしている。

明美「ケーキと焼き菓子販売してます。いらっしやいませ、どうぞ」

と、雅也がやってくる。

雅也「明美ちゃん」

明美「木内先輩、来てくれたんですか」

雅也「今日は、お客兼取材として来たの」

明美「取材？」

雅也「実はね、学校新聞の記事書かせてもらうことになってね。学園祭のことを記事にすることになったから、姉妹校のブースもいろいろ回ってるの」

明美「ええ、じゃあうちのケーキやお菓子のことも書いてくださいよ。（と手を引くと学生たちのところに行き）木内先輩来てくれた」

学生たち「お疲れ様です」

雅也「（笑って）ああ、みんないるじゃん。

（と並べられたお菓子を見て）いや、どれもこれも美味しそうね。（と明美に）これ、みんな学生たちで作ったの」

明美「もちろんです」

雅也「（メモをしながら）こういう仕込みって、いつぐらいからやるの？」

明美「まず、メニュー決めるのに半月ぐらいかかって、そこから必要な材料を一覧表にまとめるんです。作り出すのは、生ものが多いんで基本的に前日に一気に。作り貯めしちゃうと、美味さが逃げちゃいますからね」

雅也「（メモをしながら）なるほどなるほど。へえ、せっかくだから何か買ってこうかな」
明美「ぜひ！ おすすめは、このマドレーヌです」

雅也「じゃあ、これ二つ」

明美「はい、ありがとうございます！」

雅也「頑張つて、良い原稿書くわ」

明美「楽しみにしてます。完成したら、見せてくださいね」

雅也「（微笑んで）うん」

9 居酒屋『とんちゃん』・店（夜・数日

後）

大将が焼き鳥を焼いており、若女将が

接客をしている――テーブル席で飲ん

でいる雅也、瑞枝、夏美、浩平、裕司。

夏美「じゃあ、無事に学校新聞の原稿書き終わったんだ」

雅也「うん。先生の添削はあったけど、何とか無事にね」

瑞枝「学校新聞の一面を書くなんて、すごいことじゃん。今に、うちーにはどんどん仕事が来るようになるって」

雅也「そうかな」

浩平「フリーペーパーの連載もしてるんだろ。順調じゃないか」

雅也「まあ、これでデビュー活動も上手い
けば良いんだけど」

裕司「キャリアセンターから、ほぼ毎日いろ
んな求人案内のメール来るけど、確かに文
章系の求人ないもんな」

雅也「だから俺も、自分でいろいろ求人調べ
てるんだよ。でも、広告代理店とか制作会
社のライターって、ほとんどが実務経験三
年以上とかっていう条件つきばかりで、
新卒を雇ってくれるようなところなんてな
くてね。だから、どうしようかなと思って
るところなの」

夏美「デビュー系も大変だね」

雅也「何とかポートフォリオも進んできたけ
どさ、それでも進路が決まらないとどうし
ようもないもんね」

と、若女将が上串とどて煮を運んでく
る。

若女将「はい。上串とどて煮ね」

雅也「ありがとうございます。(と一同に)

この上串とどて煮が、本当に美味しいんだから」

夏美「何が入ってるの、これ？」

雅也「この上串はね、ねぎまを衣で揚げてるの。ここの名物でね、前にみずちゃんとき来たとき、即ハマったの」

瑞枝「だって、美味しかったもん」

雅也「さ、食べてみて」

浩平、裕司、夏美が上串を食べる。

浩平「うまッ」

裕司「これはいけるわ」

夏美「美味しいッ」

雅也「だから言ったでしょ」

浩平「ズルいぞ。福本だけ先にうちーと飲みに行くなんて」

雅也「だから今回は、こうやってみんなを誘っていかうって話になったんでしょ。眞榮田が行きたいって言うから」

浩平「こういう雰囲気居酒屋が良いなと思つて、羨ましかったんだから」

瑞枝「私だけ、先に得しちゃいました」

夏美「良いなあ」

雅也「どて煮も美味しいんだよ、食べてみて」

夏美「（食べて）うん、美味しい」

浩平「うちーのチョイスが良いんだろうな」

雅也「そりゃ、家族で昔から食べるに来てたお

店だもん」

浩平「気に入った、ここ」

雅也「（笑って）それは良かった」

10 『スクエア・トラスト』・事務所

雅也と安本が話している。

雅也「え、佐伯さんが？」

安本「そうなの。家庭の都合で、今月末で辞めることになってね」

雅也「そうですか……でも、佐伯さんが退職したら、『なご弁新聞』はどうなるんです

か？」

安本「それなんだけどね……」

雅也「……？」

安本「木内君、表面の取材記事と裏面の告知記事や連載といった全般、お願いできないかしら」

雅也「え、僕が表面も書くんですか？」

安本「そりゃ、学校生活もある中で、インタビューや取材記事を書く時間は限られてるかもしれないわ。でもね、これはある意味では、実績にもなるし、良い経験になるんじゃないかと思ってるの」

雅也「社長……」

安本「木内君は、イラレとかパソコンのソフト使える自信ある？」

雅也「まあ、基本的な操作は授業でやってますから」

安本「じゃあ、執筆だけじゃなくて、イラレでの編集もお願いできないかしら？」

雅也「え、僕がですか……」

安本「そんな難しい編集作業でもないのよ。だから、仕事の一環としてお願いできないかなと思って」

雅也「はあ……」

安本「まあ、デザインはある程度はフォーマットとしてテンプレされてるから、後は写真や原稿の差し替えなんだけどね」

雅也「そうですか。けど、僕なんかでできま
すでしょうか？ それだけが不安で」

安本「気にすることはないわ。連載小説も好評で、学校とも連携してうちの手伝いをしてもらおうって、事務局の先生たちにはもう賛成をいただいているんだから」

雅也「随分、ここも変わりますね」

安本「形が変わることを、良いと思わなきゃ」

雅也「そうですね」

安本「このタイミングで、木内君がいてくれて良かったよ。もし、木内君と出会わなければ、フリーペーパーの媒体発行だって、どんなことになってたか」

雅也「いえ、そんなことは」

安本「木内君が原稿制作や編集までやってくれたら、どれだけ助かるか」

雅也「とても光栄な話だと思っております。まだ、インタビューや取材記事の執筆は慣れてませんが、これも一つのチャンスと経験だと思つて、ぜひやらせてください」

安本「木内君がその気なら、私たちも全力でバックアップするわ。頼んだわよ」

雅也「はい。精一杯頑張ります。(と微笑むと) やっぱり、こちらでお世話になつて良かったです。チャンスは、どこに落ちてるか分からないもんですね」

安本「そうね」

雅也「これから、『なご弁新聞』制作に全力を注ぎます。よろしく願いします」

微笑む安本——雅也も笑顔を返す。

つづく